

令和5年4月号

一宮町の歴史特集 ― 加納久朗没後60年 ―

ワレワレハ千葉県ノタメ

千葉県ハ日本ノタメ 日本ハ世界ノタメ



【第1回 はじめに】

今年2023年は町ゆかりの偉人・加納久朗の没後60年の年になります。また明治6年(1873)6月に千葉県が誕生してから150年の節目の年でもあります。

加納久朗は、明治19年(1886)、最後の一宮藩主である加納久宜の子として誕生しました。東京帝国大学卒業後、横浜正金銀行へ入行。以後大連(中国)、ニューヨーク、ロンドン、カルカタ(インド)といった世界各地の支店に赴任、昭和9年(1934)にロンドン支店の支配人に就任します。戦後、公職追放されますが、追放解除後はGHQと財界の連絡役として活躍、日本住宅公団(現在の都市再生機構の前身の一つ)初代総裁に就任します。総裁辞任後の昭和37年(1962)には千葉県知事選挙に出馬、当選を果たしました。知事時代には「週休2日制」の導入や移動県庁などを実施し、「アイデアマン」知事として各界の話題になりました。

このように世界やさまざまな業界で久朗は活躍をみせた人物です。

さて表題のサブタイトルは、久朗の遺言状に書かれた一文です。久朗は千葉県知事就任後わずか111日で、志半ばで亡くなりました。彼が目指したもの、見ていたものは何だったのか。これから数回にわたり見ていきたいと思います。

【主な参考文献】

『加納家史料目録』

(町教育委員会、2005年)

高崎哲郎『国際人・加納久朗の生涯』

(鹿島出版会、2014年)

中村泰『上総一宮 加納藩の歴史』

(私家版、2018年)ほか



▲千葉県PRマスコットキャラクター チーバくん(150周年記念ロゴ)

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42)1416

令和5年5月号

一宮町の歴史特集 ― 加納久朗没後60年 ―

ワレワレハ千葉県ノタメ

千葉県ハ日本ノタメ 日本ハ世界ノタメ



【第2回 青年時代の久朗】

加納久朗。名前の読みは「ひさあきら」です。久朗の三代前の加納家当主・久徴の読みも「ひさあきら」。そのため、加納家の関係者や町の人々は、前者を「ぎゅうろう」と、後者を「ぎゅうちよう」と音読みして区別しています。

久朗が誕生したのは明治19年(1886)8月1日。久宜の次男として東京・小石川の加納家私邸で誕生しました。兄には久元という人物がいましたが、夭折していたため久朗は実質上の嫡男でした。

久朗は明治42年(1909)、東京帝国大学法科大学政治学科(東京大学法学部の前身)へ進学。明治45年(1912)2月、父の久宜が一宮町長に就任すると、同年10月に久朗が横浜正金銀行へ入行するまで父を補佐したといえます。

なお、久朗は明治40年頃から、久宜の設立した一宮町青年会の会長をつとめています。副会長は斎藤脩一がつとめています。

青年会は義務教育後の青少年を中心に、社会人としての教養を社会教育することを目的とした団体で、さまざまな事業を活発に行っていました。久朗は会長職にはありましたが、学生だったこともあり東京にいたことが多く、実務は脩一が担っていたようです。

しかしながら、近年発見された書簡から、久朗が青年会の様子を気にかけ、脩一に対してある時は指示を、ある時は相談しながら会の運営を行っていたことがわかっています。

若き日の久朗はこのようにして、一宮町の青少年育成に貢献し、また短い期間でしたが町長・久宜の行政を支えてもいたのです。



▲斎藤脩一(1889～1940)

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42)1416